

模索から始まった APの制定

もう、アドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針=AP）は一般的な用語になったと言ってよいだろう。中教審がこの用語を用いて、高校と大学との良好な接続関係の構築を求めてからすでに10年以上が過ぎ、大学関係者にとってなじみの言葉となった。もっともそれは、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーといったさらなる類似語が出現し、横文字としての違和感が相対的に薄まったことによるところが大きいような気がする。

今でも、APの内容や形式、そしてAPを提示する目的や方法について、当事者間の受け止め方は一様ではないように思う。

中教審の答申に応じて各大学がAPを示し始めた頃、あるセミナーに呼ばれた。そこで、「心身ともに健康で、将来、病める人の気持ちが理解でき、思いやりのある温かい心を持った…」で始まる、とある医科大学のAPを紹介した。そして、この「病める人」を「子ども」に、これに続く「医師・看護職者」を「教職者」に、そして「医学・看護学研究」を「教育学研究」に置き換えたなら、そのまま教育学部のAPに転用できますねと指摘した。

このような、ある種の汎用性を持つAPが出てきてしまうあたりに、当時の試行錯誤をうかがうことができる。

APからにじみ出る 「こう見られたい」感

もともと抽象的で漠然としたAPは少なくなかったが、それが十分に改善されたとはまだ言い難い。

「知的」「好奇心」を持ち「国際」的な「視野」に立ち、「地域」の「課題」を「主体的」に「解決」できる「意欲」と「創造」力を持つ人材を求めます。

大学のAPで頻繁に見かける言葉を

大谷 奨

筑波大学アドミッションセンター准教授

② AP——問われる受験生と試される大学

曇りのち晴れの アドミッションな日々



適当に並べただけで、こんな具合にそれっぽいAPが出来上がってしまうところに、まず問題があるだろう。そして何よりも、こういった文章を読んだ18歳の高校生が、自分はこれに当てはまるかどうかを正當にジャッジすることが果たして可能かということは、真剣に考えてみなければならない。

APは「このような人材が欲しい」という表明であり、「あなたにはこういう能力がありますか」という問い掛けでもあるが、相変わらず抽象的で難解なものが多い。APの設定は、大学が自らの出自やミッションを顧みる良い機会となるはずだが、自己像を抽象的に捉えているから、APも抽象的にならざるを得ないのではないか。そして、難解なものになるのは、アカデミックな大学として見られたい、評価

されたいという大学側の願望が混じっているからだとは言えないか。

受験生と共に 自省する覚悟を

受け入れたい人材を示す手段は、APの提示に限らない。よく言われているように、入試科目はその大学が欲しい人材を端的に表現している。さらに、科目間やセンター試験と個別学力試験の評価比率、前期と後期の定員の配分などなど、入学者選抜に関する情報は、深読みすればするほど、AP以上にその大学の「AP」を雄弁に語ってくれる。実際に受験生や高校の先生が知りたいのはこっちのほうであろう。

いつか、理科3科目を課す医学部が増えたことがあった。これは、理系科目として物理、化学、生物の3つを履修させることができないような（小規模な）高校からは受験できませんよという、極めてわかりやすい「AP」でもあった。たとえその高校に「病める人の気持ちが理解でき」るような人物がいたとしても、である。

こうなると、どれが本当の「AP」かということになってしまうが、メッセージや問い掛けにはさまざまな形があってよい。ただ、APによって受け入れたい人材を示すとき、自分の大学が実際にどのような大学で、どのような方法でどのような人材を受け入れてきたのかという事実を、厳しく認識しておく必要があるのではないか。

APは大学による自己評価の表明であり、したがって大学の自己評価の力量も示していると考えてもよいかもしれない。自分はどんな人間なのかという自省は、真摯になればなるほど苦痛を伴う。それは大学という組織にしても同じことであろう。しかし、現に大学側は、APを示すことによって受験生にそれを強いている。ならば大学も、AP策定に際しては相応のしんどさを覚悟すべきではないだろうか。